琉球大学学術リポジトリ

乳房炎の手当について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-05-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮城, 正夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19644

とビールビンで結構です。

二、つくり方

先づ水洗調製したトマトを皮つきのまゝ適当（四つ切位）に切って鍋に入れ焦げつかないように注意して十分柔くなるまで煮つめます。約半量位に煮つまり柔くなった頃裏ごし、して皮と種子を除き再び鍋に入れて煮つめ、僅かにドロリとなる程度まで濃縮します。

濃縮したものは熱いうちにビールビンに詰めて、コルク栓を十分押し込み上から「ロウ」で封じておきます。

注

①ビールビンとコルク栓はあらかじめ三〇分位蒸して殺菌しビンの熱いうちに詰めなければなりません。

②ビンを殺菌する場合はお湯が沸かないうち即ち水の時から入れて行います。

③熱いうちに詰めれば相当長期間貯蔵出来ますが更に長期間貯蔵する場合はビューレーを詰め終った時氷醋酸を二、三滴添加しておけば雑菌の発生を防ぐ事が出来ると云われております。

三、製　品

トマト特有の風味があって、色は濃紅色のものが優良品であります。

家庭でつくります場合、三斤位のトマトを処理すれば、ビールビン一本分位のビューレーが出来あがります。

トマトケチヤツプのつくり方

一、材料の種類配合

材料の種類やその配合割合には、いろいろありますが入手し易い材料による一例を示しますと次の如くなります。

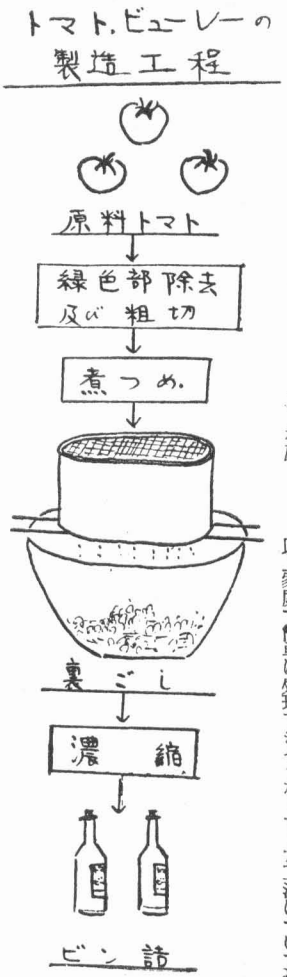
材料の配合

例1

トマトビューレー	五合
たまねぎ	一五匁
にんにく	二匁
桂皮	少量
とうがらし	〇、六匁
食酢	五勺
砂糖	八〇匁
食塩	一五匁
味の素	少量

例2

トマト	一、二〇〇瓦
たまねぎ	一〇瓦
にんにく	〇、五瓦
桂皮	〇、六瓦
とうがらし	少々
こしよう	一瓦
砂糖	八〇瓦
食塩	一〇瓦
酢の素	七CC
水	〇、六瓦



二、つくり方

先づたまねぎ、にんにくをこまかく切って約二倍の水を加えて二乃至二時間煮つめ裏ごしして汁液をとっておきます。

次に所要量のビューレーを煮沸しこれに、たまねぎとにんにくの汁液を加えて煮沸をつづけ更に砂糖と食塩を加えて煮つめ「ポトポト」する位の固さに煮つまったら残りの材料を全部加えて軽く煮たてて、熱いうちにビールビンに詰めえ固く栓をして保存します。

濃さが足りない時又は風味を良くする為にリンゴ一ケ分皮をむいてこまかく切り、パルプにして加えたり或は澱粉を加える事もあります。

三、製　品

外観は色が自然の濃紅色で粒がこまかく、ビンを傾けてもすぐには流出せず、振って出る程度のものが良品であります

以上家庭で簡単に処理できそうなトマト加工法について述べましたが、青果用として不向なトマトや、家庭菜園で一どに沢山とれて困るような事がありましたら、加工貯蔵しておく事が無駄もなく一番よい方法だと思います。

（宮里興信）

乳房炎の手当について

一、乳房の解剖

乳房は直接に乳の生成に与る乳腺（此を実質と云う）と此等乳腺の間隙を充たし又乳腺全体を包む結合組織（此を間質と云う）更に乳腺で生成された乳汁が体外に排出される迄の間に通過して来る輸乳管、乳槽（又乳洞）乳頭管（又腺管）乳頭孔に区

分される。

二、乳房炎の分類

乳房炎は其の侵された部位によつてカタール性、実質性及び間質性乳房炎の三つに区分される。

三、カタール性乳房炎

輸乳管、乳槽等の粘膜を侵す。つまり粘膜の炎症と云う意で斯く命名されている。本症は分娩直後機能が旺盛なときに発し易い。通常乳牛の後乳房一区に発し次いで同側前房に蔓延するものであるが更に反対区をも侵す事がある（左右の乳房は総ての動物に於て体の中央を縦に走る乳房間溝によつて截然と分かたれている。又前後の乳区は腺組織は明かに分かたれていて一乳区の乳房炎が直ぐ其の前後区を侵す事はない、反対区を侵す事は更に困難となる）。粘膜の炎症産物は乳汁に混合するので乳質は最初から変化する、然し其の変化は当初は不識に過し勝ちであるが此をB・T・B（ブロームチモールブルー）を塗つた診断用紙の上に牛乳の一、二滴を落して色の変化を観察すると乳房炎の発見は容易となる。即ち其の色が黄色ならば健康、緑色ならば軽症、青色なら重症と診断するのである。

1、原因　多種の化のう菌の感染によるか其の感染経路は三種ある即ち乳頭管より、淋巴管より、又血行よりの感染である。就中乳頭及び搾乳者の手の汚染、廐床の不潔等により乳頭管よりの感染の機会が最も多い。又此等の化のう菌は到る所に散在し管理人の身体被服にも多数附着して生存していものである事を想う場合感染の機会は常時あるものたという事が出来る。乳汁の鬱滞を来す諸原因は又本症の原因となる。即ち未熟の搾乳者による搾乳不全、乳頭損傷による疼痛又は粗暴な搾乳による搾乳の嫌忌又畜途の汽車、船舶の輸送は乳汁か輸乳管及び乳槽内に滞溜し乳質の変化分解を来し其が細菌の好都合な培養基となつて本症を誘起する事になる。

2、症状　軽症なものは局所の変状及び全身症状を欠き往々看過され易いが病症の進行に伴ひ乳房は軽度の腫脹を来し緊張して疼痛を帯び体温は急に四〇度以上に上昇する（牛は平温三三七・五度から三九・五度）乳汁は稀薄水様でじよ状凝塊（綿の様な繊維性のものやうどん粉をねり固めた様なもの）を混じ此を静置すると不潔黄色のクリーム層と帯黄灰白粘チヨウノウ様の沈サとに分離する。此の沈サを鏡検すると多数の白血球と細菌を証明する事が出来る。なお乳腺に故障がなく輸乳管のみが侵され粘膜の肥厚変性によつて輸乳管が閉塞されるようになると乳汁の鬱滞によつて乳房上部に滞溜ノウ腫を形成する。此を乳房結節と称し乳房結核と誤診され易い。

3、療法　乳房実質炎を継発しない間に処置が適切に実施されると数日で治癒する、然し慢性に移行したもの多数の乳房結節を生じたもの又実質炎を既に継発したものは予後不良（治癒の見込がない）である。手当としては充分安静を行い再三搾乳して乳房を刺戟する事である。即ち昼間は二時間毎に夜間は七時間休止して充分搾乳する化学療法としてはペニシリンの筋肉内注射（油性ペニシリン六瓦、一八〇万単位）、局所に対しては充分に搾乳して後ペニシリン水溶液（二〇―三〇万単位を五〇CCの蒸溜水又は五%ブドウ糖溶液に溶解）を乳頭孔より注入し此を乳槽より更に輸乳管、腺組織迄浸透させるようにもみ上げる、そして此は次回の搾乳迄其保とする、此の操作を昼間二回以上試みる、又感染細菌の種類によつてはストレプトマイシンの〇・五瓦を少量の蒸溜水に溶かし前記のペニシリン溶液に混じ協同注入をすると奏効顕著な場合がある。又乳頭孔よりの注入用軟膏としてはオーレオマイシン、テラマイシン、ペニフラシンAゲル等の乳房炎用軟膏があり此等は発病と同時に適切に使用される場合は五・六本の継続使用により此を全治せしめる事が出来るが慢性症に対しても効果がある。其他搾乳後乳房内を殺菌洗滌する目的で一%重曹水、二%硼酸水等の落液（一〇〇CC以上）を乳房内に注入し乳房を軽くもみ薬液を普く輸乳管に分配して後搾出する、此の操作は前記のペニシリン溶液の注入前に行うと効果的である。又乳頭の炎症が顕著で搾乳困難な場合は搾乳（又導入管）を用いて搾出すると搾乳が容易となる勿論此を使用する前後は完全に消毒しなければならない。

四、実質性乳房炎

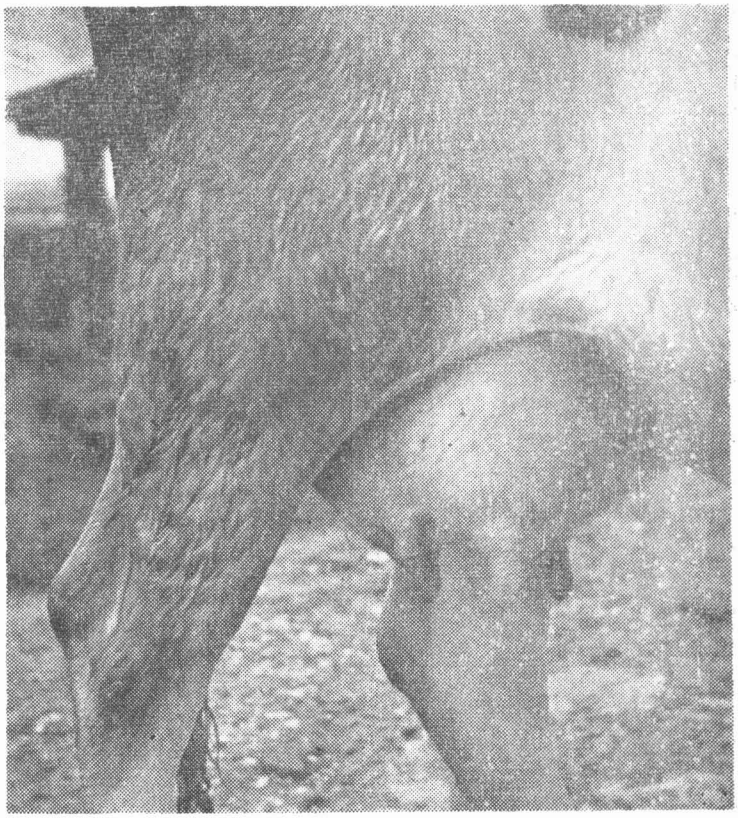
乳腺の実質を侵すものでカタール性乳房炎より継発するのを常とするが稀に血行性に来る。即ち身体の他の部位の結核病巣乃至化膿巣から結核菌及び化膿菌か血流に伴い乳房内に転位して其処に結核性乳房炎及び乳房膿瘍を形成する場合である結核性の場合は菌の証明又ツベルクリン反応によつて診断されるそして此は法規により殺処分されねばならない。

軽症　軽症ではカタール性乳房炎に類するが重症では泌乳量減少し帯黄灰白粘稠乳を産出し次いで次第にトウ黄色（少しく赤味を帯びた黄色）或は不潔赤色を帯びじよ状片または凝固片を混じ悪臭がある、乳房は高度の腫脹を来し硬固となり往々疼痛を伴ふ、同時に乳房淋巴腺の腫脹が見られる。全身症状としては体温上昇食欲廃絶脈搏等がある、本症は直接泌乳開始時に多発する。

療法はカタル性乳房炎に準ずる

五、間質性乳房炎

乳頭または乳房の皮膚の外創から化膿菌等の侵入によつて発生する又は実質性乳房炎より炎症が蔓延して発する、大きくて



右後は乳房炎のため完全な機能の停止した乳頭、他の3乳頭は健全なものです。大きさを比較して下さい。

下垂した乳房に起り易い、潮紅して温熱疼痛ある大腫脹を生じ指圧痕を印する（指で押すと其の痕跡が残る）皮下織に沿って拡がるから乳房の分区に関係なく傾に憂慮し乳腺及び乳槽輸乳管を侵さないから病初に於ては乳質には変化はない。

療法 創面を処理し初期は二%硼酸水、醋酸鉛溶液（蒸溜水一〇〇〇ccに対して醋酸鉛一〇瓦、醋酸亜溝を溶かす）又ブローロー氏液（蒸溜水一〇〇〇ccに対して醋酸鉛五瓦、明ばん一瓦を溶かす）等で冷湿布を行い此を一日数回繰返へす、又ペニシリンの筋注（前記同様）を行い冷湿布によっても腫の軽減が来ない場合は速かにイクタモール軟膏、樟脳軟膏或は鉛糖軟膏等を乳房全面に塗布する其の際は乳房を微温湯で清拭して乾燥させた後丁寧に皮膚にすり込む様にして塗布する、鉛糖軟膏の代りに醋酸鉛五瓦明ばん一瓦を五〇ccの蒸溜水に溶解して此にメリケン粉を適度の硬度にねって使用する方法もある。最後に本症は病初に於ける正確な診断と其の処置が大切で其れを誤ると速に慢性に移行せしめ終に不治の結果を招くので乳房に少しでも変状を認めた場合は速に獣医師に診断を乞うて早期に処置する事が何よりである。

（追記）本文は専門的な用語が多くやゝ難解でありますがその代りつとめて正確に述べてあります。精読を希望いたします。

（宮城正夫）

農業経営と生産

農業は生業 であると同時に企業であるから、一定面積の土地を活用することにより、最大の純益を挙ることが目標である換言すれば作物と家畜を材料として、土地、資本、技術、労力を如何に活用すれば、最大の純益を挙げることが出来るかを考究し、決定し、そしてそれを実行に移したものが農業であるこのように農業経営究極の目標は最大の純益を獲得することであるが、そのためには、出来るだけ生産費を安くすること。並びに高価で売れる品をより多く生産し、高価で売れる時期により良い価格で販売すること等が必要である

経済原理 の少費多獲である。従って 農業経営の目標を達成するためには、経営 の技術と生産の技術が双方とも高度に遺憾なく発揮されなければならない。即ち農業は種々なる要素を経営者自身で組立て、活用し、生産を挙げ、そしてそれを販売して始めて純利を獲得することの出来る企業であるから、生産の技術は経営の目標である最大の純益を獲得するという大目標